

# 大正期における「書簡文」教授

広 滝 道 代\*

## 1

わが国における国語教育史上、いわゆる「書簡文」教授が重視されたのは、明治期であった。コミュニケーションとして手近なものは、直接会って話し合うことであったが、遠隔地の場合は、書簡が第一であったから、書簡を書くことが生活の中の必要事であった。「文はやりたし、書く手は持たぬ」という庶民の嘆きを解消するためには、「学問」をしなければならない。「学問」をするためには、学校にいかなければならない。小学校にいても、簡単に手紙をかける状態にはならない。仮名文字や漢字を覚えてだけでは、簡単に書簡を書ける状態にならないところから、書簡を書くことは知的な高度な表現活動ととらえられ、小学校における学習・学力のありかたに直接間接に影響をあたえてきたことは否めない。候文体で手紙を書く表現活動が、作文教育の中で重要と考えられていたのである。

ところが、明治末期以降、書簡文の位置・役割は、初等教育、中高等教育ともに、時代・社会の状況・要請によってかなり変動を重ねてきた。

いま、国語教育における書簡文教授が、どのように考えられ、かつ実施されてきたか、その史的展開をまとめておきたい。

ここでは、明治初期から大正末までの書簡文教授の推移を国語教育実践史の立場から6期に区分し、各期の特色を示してみた。今までに目にした文献という制約の中で通覧するには不備不徹底があるが、時期区分について、つぎのような考察を加えたい。<sup>1)</sup>

第一期は、寺子屋教育の伝統の上に、社会生活に役立つ書簡文の指導が、制度の中に位置づけられた時期とみられる。明治5年「学制」が公布されて、「小学校」の部の「下等小学」の教科目に「書牘」が掲げられた。候文体の書簡文教育が重視され、文部省は、明

治8年「書牘日用文」と称する書簡文教科書を発行している。

ついで、第二期とみられるのは、明治10年代から20年代の期間である。書簡文指導に関する教科書、教授書の刊行数が最も多い時期である。当時の国語教育界に、時代の書簡作文の教育重視の風潮は、あきらかにうかがいえられるのである。また、制度的にも、現場実践に密着して、具体的に指針を示そうとするところに、その特色を認めることができる。たとえば、明治14年「小学校教則綱領」が制定され、後に国語科として統合される読書・作文・習字の教科内容はかなり克明に整えられていたことがわかる。ここで「書牘」という教科目は「読書」の中に包含された。「読書」の内容は「作文」を含み、口上書類より始めて日用書類を指導することが記されている。<sup>2)</sup>

つぎに、明治10年代から大正末までを第三期以降の各期とみなし、書簡文教授に関する状況を、年月順にまとめてみると、表1のようになる。(ただし、現在までに調査しえた範囲内の資料である。未印は未見資料。)

(以上は、国立国会図書館、京都大学附属図書館、奈良女子大学附属図書館、大阪教育大学附属図書館のそれぞれの所蔵文献、ならびに『国語教育史資料』野地潤家編、東京法令、昭和56年4月1日刊、『日本作文綴方教育史』滑川道夫著、国土社、昭和53年11月20日刊によって、作成したものである。)

表1からもわかるように、第三期、明治30年代から明治40年代には、主として小学校教育に関しての研究・論考が多く、初等教育界の問題がとりあげられている。実用主義にもとづく書簡文教授の継承、深化をはかる発表が、なお、大勢をしめている中で、一面、書簡文教授に提言がなされはじめる。その一つは、書簡文を廃止しようとする考えである。社会に出てから必要とされる日用書類・証書類を内容とするのは、目的・性格・形式・材料・方法・位置づけからみて児童

\* 本学一般教育科専任講師（国語教育学）

表1 明治10年代から大正末までの書簡文に関する著書・雑誌論文リスト

(発表年月) (題目)	(著者)	(出版社・掲載誌) (巻・号)
明治16・6 改正教授術	若林虎三郎・白井毅	普及会
24・3 新定作文書教師用	峯是三郎	文学社
24・8 教授術	黒田定治・木下邦昌	文学社
28・8 作文教授法	上田万年	富山房
○ 日用文の異議, 提出される。		
31・7 理論実験 読書作文教授方案	小山忠雄	東海林書店
31・8 尋常小学校作文教科教授方案	芦田恵之助	(『綴り方教授に関する教師の修養』大正4所収)
31・12 各科教授法	横山栄次	東海林書店
32・4 統合主義新教授法	樋口勘次郎	東京同文館
32・10 作文教科教授法	樋口勘次郎	(『文部省講習会教授法講義下巻』収録)
○ 33年「小学校令」改正され, 「国語科」として教育内容が規定される。「日用書類」, 「書簡」などの用語が削除され, 「普通文」なる用語が示される。		
未35・3 小学校に於ける今後の日用文及教授法	芦田恵之助	村上書店
未35・6 新日用文読本 巻三	芦田恵之助	村上書店
35・8 国語教授撮要	佐々木吉三郎	育成会
40・1 綴方教授案 (尋常科第四学年)	山梨県師範学校附属小学校職員研究会	
40・5 国語教授法集成 上・下巻	佐々木吉三郎	育成会
42・1 おもしろい文	芦田恵之助	教育研究58
42・11 書簡文教授に関する研究	本田小一	教育研究68
43・11 東京高等師範学校附属小学校第一部国語科教授細目	国語研究部	教育研究80
43・12 東京高等師範学校附属小学校第一部国語科教授細目	国語研究部	教育研究81
44・1 東京高等師範学校附属小学校第一部国語科教授細目	国語研究部	教育研究82
44・2 東京高等師範学校附属小学校第一部国語科教授細目	国語研究部	教育研究83
44・2 読本に現れたる日用文の種類と其取扱	村野幸二郎	教育研究83
44・4 口語体書簡文に関する調査報告	国語調査委員会編	国定教科書共同販売所
44・11 読本中の日用文の取扱	村野幸二郎	教育研究92
45・2 綴方教授の回顧	本田小一	教育研究95
45・4 綴方教授の回顧	本田小一	教育研究97
45・6 綴方教授の回顧	本田小一	教育研究99
○ 日用文教授の方法について議論多し。		
大正 2・2 独乙における作文教授法について (下)	保科孝一	教育研究107
2・3 綴り方教授	芦田恵之助	育英書院
○ 東京高等師範学校附属小学校主催の全国訓導協議会第一回国語科が, 開催される。「綴方の部」では, 日用文に関する議論が続出する。		
2・8 綴方に於ける日用文の教材選択について	牧野真澄	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 綴方に於ける日用文の教授につきて	宮野勇太郎	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 書簡文の作法について	渡辺柳三郎	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 候文につきて	山田幾次	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 系統的綴方細目編成上注意すべき事項		教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 綴方教授の系統に就て	山崎 隆	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 部会記録		教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)
2・8 綴方教授細目に就て	平野安兵衛	教育研究 (臨増, 全国訓導協議会報告)

- |                        |            |                    |
|------------------------|------------|--------------------|
| 2・8 綴方教授細目の改良に関する研究    | 萩原頼平       | 教育研究（臨増，全国訓導協議会報告） |
| 2・8 総会                 |            | 教育研究（臨増，全国訓導協議会報告） |
| 2・10 書簡文講話及文範          | 芳賀矢一・杉谷虎蔵  | 富山書房               |
| 未 2・12 綴方教授に於ける普通文と日用文 | 斉藤諸平       | 小学研究               |
| 未 3・1 日用文教授法           | 長谷川松太郎     | 三重教育               |
| 3・1 綴方教授法              | 芦田恵之助      | 育英書院               |
| 3・1 国語教授の欠陥            | 友納友次郎      | 学校教育 1             |
| 未 3・2 書簡文教授の一方法        | 久能栄一       | 小学研究               |
| 未 3・2 経験に基ける系統的書簡文教授法  | 尾島半次郎      | 南北社                |
| 未 3・3 はがき文の教授          | 花田甚五郎      | 小学校                |
| 3・4 囚はれたる綴り方の教授（一）     | 友納友次郎      | 小学教育 4             |
| 3・5 系統的書簡文教授法を読む       | 如矢生        | 教育研究123            |
| 3・6 書簡文教授の新研究          | 久能栄一・花田甚五郎 | 弘道館                |
| 3・9 綴方教授上 古くて新しい問題     | 芦田恵之助      | 教育研究128            |
| 4・1 大正三年に於ける国語教授の傾向    | 友納友次郎      | 学校教育13             |
| 4・1~12綴り方教授細目          | 芦田恵之助      | 育英書院               |
| 4・5 綴り方教授に関する教師の修養     | 芦田恵之助      | 育英書院               |
| 未 4・6 簡明日用文教授の系統       | 萩原頼平       | 現代教育               |
- 広島高等師範学校附属小学校主催の第一回全国小学校教育研究大会が、開催される。「綴方の部」では、日用文に関する議論多し。指導の形式面について決議する。
- |                     |  |                        |
|---------------------|--|------------------------|
| 4・7 綴方教材の系統を如何にすべきか |  | 学校教育20（第一回全国小学校教育研究大会） |
| 4・7 書簡文に就いての問題      |  | 学校教育20（第一回全国小学校教育研究大会） |
| 4・7 部会概況            |  | 学校教育20（第一回全国小学校教育研究大会） |
| 4・7 第二部協議           |  | 学校教育20（第一回全国小学校教育研究大会） |
| 4・7 決議案             |  | 学校教育20（第一回全国小学校教育研究大会） |
- ◎ 4・7 写生を主としたる綴方新教授細案 上・下巻
- |                         |           |              |
|-------------------------|-----------|--------------|
| 5・3 尋常小学校書簡文            | 五味義武・駒村徳寿 | 目黒書店         |
| 5・7 尋常小学校に於ける書簡文教授      | 松浦佐吾二     | 立川文明堂        |
| ◎ 5・9 写生を主としたる綴方新教授法    | 丸山良二      | 国語教育1・7      |
| 未 5・12 日用文教材配当案         | 五味義武・駒村徳寿 | 目黒書店         |
| 6・2 読方に於ける日用文教授（一）      | 長井吉郎      | 普通教育         |
| 6・4 読方に於ける日用文教授（二）      | 駒村徳寿      | 学校教育39       |
| 未 6・5 書簡文教授につきて         | 駒村徳寿      | 学校教育40       |
| ◎ 6・6 綴方教授研究放談（三）       | 白上忠利      | 教育之実際        |
| ◎ 6・7 綴方教授研究放談（四）       | 五味義武      | 小学校23・6      |
| 6・8 手紙文の綴り方             | 五味義武      | 小学校23・7      |
| 未 6・8 書簡文の教授について        | 佐藤信義      | 国民教育教材研究15・8 |
| 6・11 日用文の基礎的取扱          | 丸山大介      | 小学校          |
| 7・3 綴方教授法の原理及実際         | 村瀬清三郎     | 普通教育         |
| 7・3 綴方十二ヶ月 三月の巻         | 友納友次郎     | 目黒書店         |
| 7・11 教師の実習を主としたる綴方教授法講話 | 芦田恵之助     | 育英書院         |
| 8・2 綴り方をして系統あらしむる方案（一）  | 友納友次郎     | 同文館          |
|                         | 木下米松      | 国語教育4・2      |
- 日用文に関する議論，下火になる。
- |                     |      |                    |
|---------------------|------|--------------------|
| 8・3 綴方に於ける着想の発達につきて | 奥村謙二 | 教育研究（臨増，全国訓導協議会報告） |
| 8・3 綴方教授細目の編纂につきて   | 砂川孝平 | 教育研究（臨増，全国訓導協議会報告） |

8・3 尋常科に於ける日用文教材	東尾真三郎	教育研究（臨増，全国訓導協議会報告）
8・3 会議の概況		教育研究（臨増，全国訓導協議会報告）
8・3 綴り方の部 質問討議		教育研究（臨増，全国訓導協議会報告）
8・5 綴り方をして系統あらしむる方案（二）	木下米松	国語教育4・5
8・5 綴り方教授に於ける書簡文 ——児童生活と書簡文——	飯田恒作	教育研究191
8・6 綴り方教授に於ける書簡文 ——普通文と書簡文——	飯田恒作	教育研究192
8・6 綴り方をして系統あらしむる方案（三）	木下米松	国語教育4・6
8・7 日用文教授について	白鳥千代三	国語教育4・7
8・10 綴り方教授に於ける書簡文 ——普通文と書簡文其の二——	飯田恒作	教育研究192
未 8・11 尋常小学校綴方教授書巻三	芦田恵之助	育英書院
8・12 日用文の取扱について	山川良雄	国語教育4・12
8・12 綴方と手紙文	安藤久太郎	国語教育4・12
◎ 9・1 日用文の指導（一）	五味義武	国語教育5・1
9・1 口語文の将来	伊藤長七	国語教育5・1
9・1 大正日々新聞と口語文	保科孝一	国語教育5・1
◎ 9・2 日用文の指導（二）	五味義武	国語教育5・2
9・2 尋五の綴方教授	並河 昇	国語教育5・2
◎ 9・3 日用文の指導（三）	五味義武	国語教育5・3
9・3 口語文用例案に就て	保科孝一	国語教育5・3
◎ 9・4 日用文の指導（四）	五味義武	国語教育5・4
◎ 9・5 日用文の指導（五）	五味義武	国語教育5・5
9・6 尋常綴方教授書 第三学年前期用	友納友次郎	日黒書店
◎ 9・6 日用文の指導（六）	五味義武	国語教育5・6
9・7 予が試みたる綴方教授の実際	河辺和四郎	国語教育5・7
9・8 国語読本の研究（五）	国語研究部	国語教育5・8
9・9 尋常綴方教授書 第四学年前期用	友納友次郎	日黒書店
9・11 我が校の綴方教育概要	安藤久太郎	国語教育5・11
9・12 国語読本巻六の研究（三）	国語研究部	国語教育5・12
10・3 書簡文指導としての試み	麻野光良	国語教育6・3
◎ 10・3 綴方指導の実際	五味義武	日黒書店
10・4 綴方教授の実際的新主張	丸山林平・田中豊太郎	大日本学術会
10・5 国語読本巻七の韻文と書簡文	秋田喜三郎	国語教育7・5
10・11 随意選題か課題か	飯田恒作	教育研究230
12・4 綴方教授系統案	多牧宇藏	国語教育8・4
12・5 綴り方教授細目制定について	丸山林平	教育研究257
12・5 小学綴方教授細目	東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会	培風館
12・7 綴り方協議会の感想	飯田恒作	教育研究259
12・11 第二十回全国訓導綴方協議会研究報告討議		教育研究265（臨増号）
○ 13年以降，日用文に関しての意見を述べた独立した論文，見られず。		

（◎印は五味義武の日用文に関する著書・雑誌論文）

（未印は未見資料）

（ただし，現在までに調査しえた範囲内の資料である。）

に適さないとする見方である。もう一つは、小山忠雄、横山栄次、樋口勘次郎などにみられる書簡文改良論である。「書簡文」の必要性・重要性を説きつつも、その在来・現時の不振を衝き、ともかくも法令上にも示された「国語科」の新体制に応ずる方策を説き示そうとする見方である。<sup>3)</sup>

佐々木吉三郎の『国語教授法集成』は、明治40年代にあつては、国語科教授法関係の文献として貴重な存在をなしているといえる。その中で、書簡文の位置づけを、つぎのように述べている。

「目今の世の様は、候文体が次第におとろえて、口語体のものがだんだん勢力を得て来ますが、かくても、日用文体を別にたてて論ずる必要があるかは、一般に疑問とせられておるやうであります。私は日用文には日用文特有の注意が必要で、思想の選択がおのずとかわつて来るものと考えます。それですから、たとい口語体の日用文のみ行わるる世となつても、別に一体として、取扱を工夫することが必要であります。」<sup>4)</sup> これは、対者の有無によってわけられた文体分類にもとづく日用文のとらえかたであり、一般に明治40年代の書簡文の作文教育は、このようにみられている面が多いのである。

第4期は、大正初年から大正8年までと考えられる。この期は、前期を受けて書簡文教授の改良論が支配し、書簡文の教授方法・その指導の開始時期・指導内容・教授組織について、現場の問題意識にもとづいてまとめられた論考を多くみることができる。

芦田恵之助の『綴り方教授法』(大正2年3月)においては、「書簡文教授の改革」と題して小項に、「まづ仮説の文題を廃しなければならぬ」(224ページ)と述べて、児童の実生活から文題を選択したら、真情のこもった文章を会得できると説くのである。とくに、芦田恵之助は、児童の実感の充実したものを尊い書簡文であると述べている。

なお、単行本のほか、この時期にあつては、「書簡文」の作文教授に関し、雑誌論文の多く現れている点にも留意なくてはならない。

大正2年8月、東京高等師範学校附属小学校主催の全国訓導協議会が開催され、国語科の実施状況をふりかえって、「綴り方の部」では、とくに書簡文教授に深い関心が注がれた。<sup>5)</sup> 書簡文指導の形式化、固定化、偏向化を救い、教授ならびに、教授法の研究をまとめていこうとする機運があらわれてきた。つづく、大正4年7月、広島高等師範学校附属小学校主催の第1回全国小学校教育研究大会が開催され、初等教育界

の諸般の問題がとりあげられている。国語科の作文教育に関して、とくに活発に発表・報告がなされ、正しい望ましい書簡文教授が探究され、考究されていた。<sup>6)</sup> このような状況にあつて、五味義武と駒村徳寿は『写生を主とした綴り方新教授細案』(上・下二巻)を大正4年7月23日に、つづいて、その姉妹編にあたる『写生を主とした綴り方新教授の原理』を翌年9月に発表した。<sup>7)</sup> ここで、五味義武は、当時すでに、批判され、反省されていた書簡文教授についての考えを確立したのである。<sup>8)</sup> 五味義武の研究は、大正初期の書簡文の作文教育としては、理論・実地の面で、見るべき妥当な見解が示されており、現場指導の立場から生み出されたものとして、注目すべき特色をもっている。

第五期は、大正8年から大正13年までと考えられる。書簡文教授の取り扱い・方法の問題に対して、発言が下火になってくる。いまは、それらのうち、主なものをとりあげることにする。

大正8年3月、東京高等師範学校附属小学校主催の全国訓導協議会が開催されるが、大正2年の同協議会と比べて、書簡文教授法の開拓と樹立はまだ十分にはなされていなかった。<sup>9)</sup> たとえば、書簡文に関しての単独の論考は東尾真三郎の「尋常科における日用文教材」だけである。例えば、東尾真三郎は、当時の書簡文教授に、一定の標準を求めているのである。それに対して、「真剣な文ならなんでもよい」という考えに立った討議結果が示されているのである。こうした点にも、書簡文教授の教育への無自覚の一面がうかがわれる。

また、大正後期における書簡文教授のありかたに関し、1つの独自の提案がなされている。それは、前出の五味義武(当時、東京女子高等師範学校附属小学校訓導)による提案である。五味義武は、大正9年1月から6月まで6回にわたり、書簡文の作文指導について実践にもとづく独自の見解を示している。五味義武は、書簡文の位置、役割の重要性に触れ、その教授の実際の平浅で十分でないことを指摘しているのである。<sup>10)</sup> 当時の著書・雑誌論文の中に書簡文教授についての提案が見られない中にあつて、特異な提案といえるべきであるが、当時の現場の考え方の1面を代弁しているものともみられる。

しかしながら、大正13年以降、第6期とも言える時期になると、書簡文教授に対し、懐疑的否定的な考えが国語教育界を広く覆うようになる。明治期に作文指導の中心的役割を果たし、大正初期には、積極的に

取り組むべきことを主張したさまざまな発言がみられたが、資料にあるように、書簡文に関しての独立した論考は昭和戦前の間、みられなくなる。作文教材を通じての学習・教育は、なおしっかりした基礎に立ち、広く浸透していたわけではなかった。

以上、明治期から大正期、そして昭和戦前までの歩みのなかで芽ばえ、そして当然育てられるべきであったすぐれた理論や実践が、吸収され、たどりついた姿を、大正末期の作文教育が示しているのも事実であろう。ある意味では、書簡文教授においては、大正末期が戦前の作文教育の歩みのたどりついた点とみることもできる。

また一方、戦後の作文教育は、戦前の作文教育との微妙な連続と断絶のうえに成立してきている。大正末期の作文教育をいかに否定的に評価しようとも、今日の作文教育の成立は、それとの関連なしには考えることができない。

本稿においては、こうした国語科教育史において、書簡文の作文教授が、どのように考えられ、かつ実施されてきたかの概観をもとに、書簡文教授の基本的性格と構造を明らかにしようとするものである。もとより、本稿はその全貌をつくすものではない。以下の考察においては、性急な評価をなるべくさけて、相対的な事実の展開をたどることによって、その実態と問題点を明らかにすることに、まずは努めたいと考える。

## 2

まず、大正9年、五味義武は「日用文の指導」と題した連載において、つぎのように述べている。

「現下の実際教授を見ると一方には甚だしくこれを重視する者があるかと思へば、一方には殆ど捨てて省みない様な者もあって、多少同様不定の域に今尚その立場がきまらない様な状態にある。のみならず指導の方法及び内容に関しても徒に旧来の型そのままを適用して模倣をこれ事とする者もあり、又極めて主観的立場から自然に放任してややもすれば的確なる修練を欠くような者もあって、如何なる態度に指導すべきかはまだまだ多くの考究を要する問題が残されているやうに思う。<sup>11)</sup>」

当時の綴方教授界を評して、指導の目的・内容・方法・位置づけに関して、簡明であるが、要をえたとらえ方がなされている。五味義武独自の視点から書簡文教授を体系化させようとする意欲と自信のほどがうかがえる。

そして、当時の現状認識の不的確であることを指摘しつつ、自分の指導実践を足場にした独自の教授論の提案がなされる。その提案の冒頭はつぎのようであった。

「余は日用文の指導を以て綴方教授上甚だ重要なことと考へている。随つて或る一部の人の如く一般普通の文章が綴れれば自然手紙の文も書けるやうになると称して、これが修練を一般文章の結果に俟つやうな姑息の手段を許すものではない。さりながら又一部の論者の主張する如く、實用本位の立場から生活の準備の爲とか実社会の要求の爲とかいつて、徒に外面的の必要に拠つてこれを高唱するものではない。その趣旨は全く発表修練の意義乃至目的に省察して本質的の価値を認めているので、そこには日用文が発表の第一義に立脚して真に根本的修練を遂ぐべき重要な根柢を有するからである。而してこれと同時にその修練を他に委ね若くは全く放任するに於ては、到底十分なる成績を収めることは不可能と思ふ所から、これが具案的指導を特に力説する訳なのである。

尤も日用文の練習はその都度然るべき材料によつて相当に意を注いだならば、余り具案的指導によらずとも一通りの記述に習熟することは出来よう。読本の材料に載せられている手紙を模範としてこれに似たやうなものを綴らせる方法でも大体の指導の出来ないことはない。しかし是等は餘りに姑息の方案であつて固より完全なるものとは謂はれない。日用文が日用文としての特質の上に特殊の内容と技能とを有するならば、それに基いて根柢からこれが修練を企て、成るべく組織的系統的にその指導を考究するは最も策の得たる者であると思ふ。

而してまたその指導方法も児童の発達に応じて自然の途に導き、故意に型の如く当箱せしめることは大いに警戒せねばならぬことと思ふ。日用文が一定の様式をもっているといつても、それを直に児童に適用せるは児童の真実なる発表を阻止するものであつて、却つてその助長発達を妨壓する所以である。

(中略) 変へることそのものの可否は暫く措き、又それが唯一の目的ではないけれど、徒に旧套を墨守するにも及ばないことである。日用文の特殊の形式など今日に於てどれ程の価値があらうか。改むべきものは改め、捨つべきものはどしどし捨てて、最早新しい日用文に進むべきは時代の進運に伴ふ当然の歸趨ではあるまいか。随つて児童の本然の発表を此所に導き、拘束なき自由の境涯にやがて日用文の改造をはぐくむことは實際教授者の当に三思すべきことと思ふ。余はか

ういふ意味から児童の日用文に対して特に期待するものが多かったが、実際に当つて見て一層この感を深くしたのである。<sup>12)</sup>

これは五味義武みずからの書簡文教授の実践をふりかえっての省察を述べたものである。指導の目的としては、児童ひとりひとりの表現能力を第一義に考えていること。目的のためには組織的系統的に作成された具案的な指導が積み上げられねばならないと考えていること。さらに五味義武の指導者・授業者としての眼は、児童たちの綴ろうとする表現姿勢をはじめとして、児童の言語発達に応じた書簡文指導の進展をはかりとしたことが、うかがえる。大正期に児童尊重の精神をふまえて、新しい作文教授論を構築しようとする捨て身の姿が見られるのである。当時、書簡文教授の授業を展開していくことに懐疑的であった綴方教授界の中にあつて、綴方教授の場に書簡文による有効な記述作業を児童たちに選んでいこうとしたのだと考える。

### 3

さて、「国語教育」誌に連載された書簡文教授の指導過程については、著者五味義武みずから、つぎのように示している。

「余は大凡指導の階級を次の三期に画して、それぞれ特殊の方法を講じたのである。

第一期 尋常四学年迄 準備としての練習

- 1, 児童の自然の発表を重んじこれを表現の一部として取扱ふ。
- 2, 随つて特に手紙としての指導を加へず専ら児童の創意にまかす。

第二期 尋常五六年 日用文の一般的練習

- 1, 手紙としての基礎修練即ち日用文の特質に立ち、又児童の実際の手紙に基づきて一般記述の指導を行ふ。
- 2, 表現に立つ手紙を主とするけれど時に平易なる実用的書翰文を加ふ。

第三期 高等一二年 日用文の特殊なる練習

- 1, 日用文の一般的記述に加へて特に実用的記述を行ふ。
- 2, されど実用的書翰文は成るべく卑近なる實際なるものを採る。<sup>13)</sup>

ここに五味義武の書簡文教授観の基本がうかがわれる。学習教材の論理にもとづく系統を自覚し、基礎能力をかためるまでの「尋常第4学年迄」、つづく幅広

い題材を設定しての一般練習をほどこす「尋常第五学年」、さらには応用力養成の「高等一二年」へと組織化した書簡文の綴方習得を中心課題として、その本質的方法的訓練の見通しをつけようとしたのである。

これらの諸過程の基礎について、五味義武は、つぎのように強調している。

「余は尋常四年頃までは必ずしも手紙の指導を行ふ必要もなく、特に不自然の途を講じてまでこれを要望するなどは余りに期待に過ぎた措置と思つてゐる。随つて児童の出来さうな場合出来るだけの要求を以て満足すべきことであつて、如何に基礎の修練が必要であつても自らそこには範囲が画される。余が児童の自然の発表により、若しくは模範文から誘導して第一歩の修練を行ふといつても要するに出来る範囲の児童に望むことであつて、不可能なる者には他日の発達に俟つより仕方がないのである。さりながら出来るならばこの種の指導によつて最初の関門を開くは洵に望ましいことで、これ迄縷々述べた趣旨も全くここに在るのである。<sup>14)</sup>

書簡文指導の準備は学習者である児童の学ぶ必要と内容を前提とし、そこから、児童の自発的・内発的な表現を考慮した指導過程を求めたのである。この根本には、旧態の形式主義からの離脱を実践した、かれの児童観が息づいているとみることができる。

五味義武は、書簡文の授業成立の基盤と価値とを、このように考えて、指導過程の一典型について、つぎのように説いた。

「実際の指導

第二 手紙の一般的修練

尋常五年位になると大抵の児童は相当に相手も出来、また手紙を出すべき機会にも接するのであるが、たまたま夏休の如き長期の休暇に於いて手紙を書くことを命じたのである。尤も相手のない指導に対しては教師自らがその相手となり、その内容などは如何なる事柄でも児童の自由に任せ、またその形式などは如何様なものであつても敢へて問はず、兎に角手紙を書きさへすればそれでよいので、之を以て最初の出発とし又その材料として夏休後第一次の指導を行つたのである。(中略)

手紙指導の第一次 (尋常五学年第二学期)

凡六時間 (夏期休業後につづいて)

第一時

一、児童の手紙 (休暇中実際に出したもの) に就い

て児童の説明及批評、適當なるものを紹介す。

二、手紙の特徴吟味（其ノ一）

イ、だれに出したか（相手の関係）

ロ、どんな事柄を書いたか（用件の内容）

ハ、どういふ時に書いたか（前後の事情）

三、予告、休暇後実際に出した手紙、若しくは出さうとする手紙を次の時間に用意すること。

第二時

一、第一回の記述練習

イ、内容は自由。（特に用件を定めず、表現的手紙を主とす）

ロ、相手を特に明瞭ならしめる為め、自分との関係、年輩、男女等に就いて記載せしむ。

第三時

一、前時間の成績の処理——批評紹介

二、手紙の特徴吟味（其ノ二）

イ、前に記載したる事項により相手の関係。

ロ、特に前後の関係を明かにする挨拶。

三、来訪者の挨拶の言葉を記述すること。（宿題）

第四時

一、挨拶（宿題）の内容吟味

イ、時候。 ロ、安否。 ハ、前後の事情等いろいろ。

二、第二回の記述練習

イ、挨拶を特に加へたる手紙……時候見舞

ロ、相手は適宜事柄は随意に他の内容を加へるも妨げず。

第五時

一、前文の処理批評訂正。

二、手紙の記述の一般的注意。

イ、児童の優良なる成績の紹介。

ロ、参考文献を提出して手紙の特徴を玩味せしむ。

第六時

一、手紙の種類の説明

イ、表現的手紙と実用本位の手紙

ロ、用件（実用）に立つ手紙の大体の分類

ハ、読本の手紙の例

二、参考文献の紹介

三、宿題 九月十月の間に随意に実際の手紙を一つ宛作つて提出すること。<sup>15)</sup>

これは、第二期、手紙の一般的修練の第一次、尋常五学年第二学期における六時間の指導過程を示している。まず、第一時の指導に臨む前に、夏休みの機会を捉え、受取人である相手を明確に意識させるところか

ら出発して、児童に自由に手紙を書く経験をさせる。その上に、第一時では、「児童の手紙（休暇中実際に出したもの）に就いて児童の説明及批評、適當なるものを紹介す。」とするのである。当時、学校教育における書簡文指導が多くの場合、読本教材中心の形式的指導に終わって、児童の生活から遊離して、役に立たなかったことを確かめてきた五味義武自身の実践経験をふまえての主張であるといえる。読本の中の他人をモデルとした文例に圧倒されることなく、友だちのよい作品の実例から入り、その特徴を吟味する、基礎的推敲能力養成指導を指摘している。これは、子どもの自己表現を基盤にした、のぞましい指導のありかたの根本とうけとることができよう。ついで、五味義武の説述する指導過程の第二時は、第一回の記述指導へとつづく。「ロ、」にあるように、作者と表現相手・時・場合とを確認して、簡潔で要領よく用件を伝えることを目的としている。コミュニケーションを目的とした本格的な手紙文指導へと展開する。第三時では、手紙を吟味し「来訪者の挨拶の言葉」を提示させ、語彙指導への応用のきくように説きえている点は、すぐれている。<sup>16)</sup>

指導過程の前半部分（第一時から第三時まで）の展開からは基本の心がまえが説かれている。児童が主体的に学習する姿勢を形作ることが、基本的に明確に示されている。芦田恵之助の主張にもみられる児童の生活体験の重視、自作法をふまえながら、まずは、児童の主体性確立を前提とすることが、的確に述べられている。書簡文教授が、深さ・たしかさを得るにはどうしなければならないか。書簡文教授の核心にふれた内容になっている。

ついで、第四時では、手紙の諸形式について、まず、社交上での消息を知識として教授した記述指導になっている。第五時では、推敲経験にもとづいた材料の吟味・訂正、第六時では、手紙の文種と書式の知識を教授して必要欠くべからざる留意事項をあげている。そして、最後の指導過程では、随意に記述させて結んでいる。前半部分の自作法によって、学習者に自発的・意欲的な態度を習得させ、後半部分（第四時から第六時まで）の三時間では、モデルを作成して、実社会・実生活に役立つ、書簡文の習得を中心課題としている。

ここに全授業時間を通して、記述練習を繰り返し行うことによって、スパイラルに表現能力を身につけるように設定された、文章表現過程のあらましがみとめられる。大正中期、五味義武の文章表現実践はすでに



集成され、作文教育の土台が固められていたことにもなる。そこには、五味義武の本質的方法的訓練の見通しをうかがうことができるのである。

大正中期の発言ではあるが、大正後期を含めて書簡文教授が方法体系の面で、どういう水準にあったかを示す一つの典型例とみることができよう。当時、書簡文の教育の不振が学校教育の面で指摘されていた時代である。同時に、学校教育の場で、地道に書簡文の作文教育が実践され、その実践研究がまとめられた時代でもあった。

五味義武を例にして考察してきた書簡文教授実践のありかたは、それ自体が大正期の一つの文章表現指導法における独自の位置をしめ、かつ独特の役割を果たしたものとして、その意義と価値をみとめることができよう。

#### 〈参考文献〉

- (1) 野地潤家編『国語教育史資料第六巻 年表』、東京法令、昭和56年4月1日
- (2) 飛田多喜雄『国語教育方法論史』、明治図書、昭和49年6月
- (3) 井上敏夫他編『近代国語教育論大系第1巻～第9巻』、光村図書出版、昭和50年11月1日
- (4) 野地潤家編『作文綴方教育史資料』、桜楓社、昭和51年5月25日
- (5) 野地潤家『芦田恵之助研究3 綴り方授業編』、明治図書、昭和58年10月
- (6) 真下三郎『書簡文用語の研究』、溪水社、昭和60年6月20日
- (7) 滑川道夫『日本作文綴方教育史1 明治篇』、国土社、昭和53年11月20日
- (8) 滑川道夫『日本作文綴方教育史2 大正篇』、国土社、昭和53年11月20日
- (9) 滑川道夫『日本作文綴方教育史3 昭和篇』、国土社、昭和58年2月20日
- (10) 野地潤家「国語科授業史研究」(広島大学教育学部紀要第20集、昭和46年)
- (11) 中西一弘「作文教育の回顧と展望」(全国大学国語教育学会編『講座国語科教育の探究2 表現指導の整理と展望』、明治図書、昭和56年2月)
- (12) 高森邦明「作文指導観の推移と展望」(全国大学国語教育学会編『講座国語科教育の探究2 表現指導の整理と展望』、明治図書、昭和56年2月)
- (13) 村重嘉勝「大正・昭和初期における東京女高師

附属校の国語教育」(お茶の水女子大学附属中学校紀要第5集 昭和55年11月20日)

- (14) 峰地光重「むかしの手紙」(日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書 昭和38年9月)
- (15) 高田嘉英「文種別指導の方法」(樺島忠夫・中西一弘編『作文指導事典』東京堂出版 昭和55年9月25日)

#### 〈注〉

- 1) 『国語教育史資料』(東京法令)によると、明治期において日用文のみをとりあげた教科書、教授書の総数は、38点、84冊。
- 2) 「小学校教則綱領」では、尋常・高等両小学校教科課程にみられる、読書・作文・習字の教授要旨・方法・程度について制度的に整備されている。「国語」に関する学科としては、「読書」と「習字」がある。「読書」はさらに「読方」と「作文」の2領域に分けられている。第3章第12条の項には、「初等科ノ作文ハ近易ノ庶物ニ於テ其性質等ヲ解セシメ之ヲ題トシ仮名ニテ単語、短句等ヲ綴ラシムルヲ初トシ稍進テハ近易ノ漢字ヲ交ヘテ簡短ニ仮名交リ文ヲ作ラシメ兼テ口上書類ヨリ日用書類ニ及フヘシ中等科及高等科ニ於テハ日用書類ヲ作ラシムルノ外既ニ学習セシ所ノ事実ニ於テ志伝等ヲ作ラシムヘシ」とある。
- 3) 明治34年4月から「改正小学校令」が実施されるようになった。新設された「国語科」の教育内容が規定され、「日用書類」、「書簡」などの用語が削除されたかわりに、「普通文」なる用語が示された。
- 4) 佐々木吉三郎『国語教授法集成』下巻、育成会、明治40年5月、27ページ
- 5) 「全国訓導協議会国語科報告」「教育研究」臨時増刊号、大正2年8月
- 6) 「第1回全国小学校教育研究大会報告」「学校教育」第20号、大正4年7月
- 7) 拙稿「写生主義による綴方指導の体系」において、両氏の試みた写生主義綴方の体系の基礎的性格を明らかにした。『国語科教育』全国大学国語教育学会紀要、第30集、71～77ページ、昭和58年
- 8) 『写生を主とした綴方新教授細案』下巻において「綴方の上で研究された大綱をのべて見ると、第一には日用文の教授に於て間に合せの実用主義に極力反対すると共に、候文体に対する意見

を確立したこと、日用文類の新方針により教授の便宜により見て其配当及境遇の具体化についての研究を続行したことを数え上げることが出来る。」(29ページ)と概観している。

- 9)「全国訓導協議会国語科報告」「教育研究」臨時増刊号、大正8年3月
- 10)「日用文の指導」(一)から(六)「国語教育」第5巻第1号から第6号、大正9年1月から6月
- 11)「日用文の指導(一)」「国語教育」第5巻第1号、大正9年1月、43ページ
- 12)同上書、44ページ
- 13)同上書、50ページ
- 14)同上書、50ページ
- 15)「日用文の指導」(三)「国語教育」第5巻第3号、大正9年3月、41~42ページ
- 16)同上書には、児童の取材したあいさつの表現例がおさめられている。たとえば、○「まあお暑いのによく御出かけくださいました。大層御無沙汰ばかりしていますが、皆様はお変もございませんか。」△「はい有り難う存じます。おかげ様で皆無事に暮らして居ります。おたく様でも御変りなく。」○「恐れ入ります。毎度御親切に御訪ね下さいまして、子供も皆元気で学校へ行つて居ります。」△「それは何より結構でいらつしやいます。」○「ほんとに今年は今頃になつて却つてお暑うございますこと。」△「左様でございますね。折角あちらへいらつしやつたお涼しくて、おあいにくでございましたね。」○「はいほんとにしけばかり続きまして困りました。一の宮はお天気さへよければ、それはいい所ですけど、しけに逢つてはもうもうつまりませんでしてね。」△「左

様でいらつしやいますか。海岸は別に外へ遊びに行く所もございませんからね。」○「あ、申し遅れました。御主人様には御無事で御帰りになりました。その節はまた御土産を頂きまして誠におめづらしく頂戴いたしました。」△「いいえどう致しまして、お礼には恐れ入ります。主人も北海道ははじめてでして、それに大分辺鄙な方へ参りましたものですから、ろくな御土産もございませんで、お恥しう存じます。あの燻製とかいふのは名許りで、私どもにはどうも戴けません。」○「併しすきすきですから。宅では大好物でして、暫くぶりで喜びました。」△「それなら宜しうございましたが、実はどうかと思ひまして。」○「粗茶ですがどうぞお一つ。」△「どうぞおかまひなく。恐れ入ります。」○「この頃はまた恐ろしい病気が流行りますが、御近所にはございませんか。」△「はい、まだ近くにはございませんが、何だかもうこはくて、毎日戴く物さへびくびくして居ります。」○「左様でございますか。御用心遊ばしませ。」(48ページ)当時、書簡用語の指導については、「読本」などの教材にたよりがちとなり、生活・学習の自然な場を求めず、やや形式的観念的に傾きがちとなる場合が多い中にあって、不自然さ、ぎこちなさはあるにしても、当時の子どもたちの取材した、大人の率直な会話表現が示されている。口語文体の普及によって、文章体文章の文範にかわるものがもとめられ、教材として利用される動きが強まったことにもよるのであろう。真に指導に役立つものとしては、このような学級の実例を、さらには学級文集という考えかたが、この時期以降ひろまっていく。